



みずみどり

2023年 2月1日 第154号

発行：いたばし水と緑の会事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 090-1423-9894

いたばし水と緑の会の

活動に参加しませんか

まちなかで自然を大切に、自然と友達になる活動です



いたばし水と緑の会は、1997年年4月に設立。身近な自然を保全すること、失われた自然を取り戻すために活動してきて20年以上になりました。主な活動フィールドは、美術館横の赤塚トンボ池と、城址のバッタ広場。活動メンバーは70才台が多い。写真は数年ぶりに実施したトンボ池のヘドロの掻き出しと畦の大々的な修理。泥はとても重く、この日の作業も1時間だけ。

さて、今は70歳代でも働き続ける人も多く、ボランティアをするゆとりもない方も多いようです。自然相手の活動はお気楽な道楽と見られているのかもしれませんが。

お気楽でもいい。慌ただしい日常のちょっとした時間を、自然の中で過ごす活動の魅力を私の経験からお伝えしたいと思います。

汗を流す楽しみから

健康のために〇〇歩歩く、という人も多いですね。でも「草を刈る」等、日頃体験しない作業で汗ばむのは、都会暮らしでめったに味わえない快感です。赤塚城址周辺は東京とは思えない自然いっぱい。大空の下、崖の木々、野鳥の声、土の地面に育つ野生植物や生き物などに会います。私はもともと昆虫や植物に詳しいわけでも、興味があったわけでもなく、自然っていいなあ、何かできるといいなあ、と思って始めた活動です。

写真右は、12月11日、バッタ広場でササを刈っているとき、何気なく落ち葉をかき分けたら飛び出してきた蛾です。ピンぼけではありません。蛾は木に止まったままぶるぶる震えていました。体温を上げるためでしょうか。元の落ち葉に戻らないので、その場を離れました。余計なことをしてしまって悪かった。ササや落ち葉の下に、越冬する虫たちがいます。そういう場所を残すようにしています。



蛾の名前を調べました。ちょっと自信がありませんが、一応キバラモクメキリガ?としておきました。

生き物や植物の観察会の方々もバッタ広場だけでなくあちこちを観察されます。私たちは（素通りではなく）同じ場所でしゃがんで草を刈ったりしているなかで見慣れない植物や、生き物に出会いラッキーと思います。野外で出会う不思議のいろいろを追跡(?)しているうちに、私はやみつきになりました。

自然をもっと知りたいという気持ちになります。

野草の名前を知りたい、虫の名前を知りたいと思い、図鑑を見たり、聞いたり教えてもらったりしました。植物の種類は多い。昆虫は種類も多いうえに幼虫は脱皮して姿を変えるし、覚えるなんて気が遠くなります。ポチポチと名前をメモし、デジカメで写真を撮り、(そしてここが肝心)できるだけすぐに写真と名前を記録しました。教えてもらっても忘れますが、それでも何度も聞き、図鑑をながめ、「あっ、これは前に見たヤツ」と、ちょっとわかってくるとうれしい。図書館に行って植物や虫だけでなく土地の歴史など調べていた人はえらく詳しい人になりました。作業は効率第一ではなく、仕事でも宿題でもない。手を止めてながめたり観察したり。興味がわいたらメモ代わりのデジカメとインターネットで、しろうとでもそれなりに調べられる時代です。ザリガニのこと、トンボ、チョウチョ、モグラ達がどのように暮しているのか、子供向けの本も分かりやすくして私は愛読しています。

「むやみに手を付けてはいけない」と叱られたビオトープ管理

ボランティア活動を始めた頃(20年程前)、当然雑草刈りをするものと思って張り切って参加した私たちに、自然に詳しい先輩から「なぜ刈る必要があるのか」と問われ考えるようになりま

した。「まず調査してから」とも言われました。動植物の調査は素人がすぐに出来ることではありません。でも、全体の様子、裸地か、草が多いか、クズが多いか、木が多いか、前回見たときと違うことなどが見えてきます。バッタ広場に種から生えた木は、1年で30cm程伸び、笹も伸びる。自然の力にはかなわないと思います。2021年、2022年は虫の好きな子ども達と生き物調べもしました。いつも今どうなっているか考えます。そして必要な手入れを考えます。

自然はごみを出さない 私たちもゼロエミッションにしたい

切った枝をそのまま放置すると水分が抜けてカサカサで残ります。なので枝を束ねてシュロ縄でぐるぐる巻きにして、地面に積んでいます。嵩が減って早く腐ります。落下した枯れ枝はまとめて積んでおき、乾いた隙間を好むヘビやカナヘビなどが利用します。

落ち葉は、矢田さん、大西さん、猪鼻さんがそれぞれのやり方で落ち葉プール（堆肥置き場）を作ってくれました。水をかけよく踏みました。カサがすっかり小さくなり2年ほどで土に。中を見たらカブトムシの幼虫がいました。今は堆肥置き場を作る人がいないので、まとめて置いて、ときどき踏んでいます。カブトムシのゆりかごです。

赤塚トンボ池とバッタ広場に立ち寄られた方が自然を感じ、いっしょうけんめい生きている動植物たちの存在を理解してもらえるといいなあと思って活動しています。

赤塚トンボ池 小さなビオトープでも残したい

赤塚トンボ池は、住民参加により設計と池づくり作業を行い、1998年春完成したビオトープ池です。大仏下に湧く湧水を引いてきて利用しています。すんでほしい生き物はトンボとカエル。どちらも普通にいる生き物です。彼らは来るには来るのですが、ヤゴは見当たらず、オタマジャクシもカエルになる前に消えてしまいます。なぜ??



左は完成直後の写真です。たちまちいろいろな生き物が放され、これは大変と、大々に宣伝をしてかい掘りをし、コイ、キンギョなど様々な生き物の他、アメリカザリガニ850匹を捕獲。2001年にもかい掘りをしてザリガニ400匹を捕獲しました。アメリカザリガニを持ち込み、自然を壊すのは人間です。そして土の自然の池に住みついた外来生物であるザリガニは雑食性、ヤゴやオタマジャクシの天敵です（悪意はなく、よい環境の中で生きているだけです）。

さて、去年はザリガニ釣りの名人?に協力いただき、ザリガニ約400匹を捕獲しました。ありがたいことです。今がチャンスです。たまったヘドロを除去し、トンボのヤゴが育ちトンボになって飛び立てるよう、トンボ池の大掃除と修理をします。

池底を干して素人による大工事??にとにかかいました。

湧き水の流入を止めました（11月27日、12月3日）

落葉の季節。斜面の落葉樹から降り注ぐ枯れ葉を集め、落ち葉溜めに。落ち葉は風情がありますが、池に溜まった落ち葉は腐ってヘドロになるので、行くとびに落ち葉を掬います。周囲の枯れ草も刈ります。落ち葉は1月になっても落ちてきます。

落ちてくる落ち葉をすくい、枯れ草を刈ります。



池の水が干あがり、いよいよヘドロの掻き出しです

（12月17日～

水が干あがっても池の中はとろろ芋のようで足が抜けません。土は重く粘っこく、スコップから離れて落ちず、仕方なく池の縁から掻き出したり、桶に入れて運び出し山側に積みました。しゃがんで移植ごてで少しずつ粘土混じりのヘドロを掘り出すのも重労働。



環境政策課の坂本さんと鈴木さんも応援してくださり助かった。写真右は掻出した粘土混じりのヘドロ。恐竜の糞のよう。



左の黒いのが粘土混じりのヘドロ、真ん中の山が池の縁（山側）と池から掬った落ち葉、右の山は昨年以前の落ち葉と刈った草の山。

「この山どうするんですか」と聞かれました。草や落ち葉は、すぐに腐葉土になります。ヘドロはあぜを修理する土として使います。

池底を空気にさらす

小さな池では、クワなどで池底の表面を削りました。空気に触れて分解することを期待します。

畦を直します。試行錯誤です

泥深い池なので足が抜けず足場が不安定で、池の中や畦の草を刈ったり、ザリガニを捕獲したりヘドロを掻き出したりの仕事ができません。なので、作業ができる頑丈な畦にしたいのです。土の畦は崩れやすい。上を歩いたりすると傷みます。雨が降り続くとザリガニが開けた穴が大きくなり、水が抜けたりしました。水研クリエイトの尾坂さんにお願ひし、板で畦を補強しました。今回も板で補強し、掻出した土（ヘドロ）を入れた土嚢を使って畦を直しました。



ザリガニがあけた穴 草が茂っていると穴を開けにくいようです。



畦を板で補強し、池底の土（ヘドロ）を掬って、畦に積んで、叩いて固めます。手で叩いたりスコップで叩いたり、土嚢袋のようなシートの上から足で叩いたり。とにかく土は重いのです。

橋の左側は最もヘドロの堆積が多く、また畦もなくなってしまったので、板の柵（ちょっと頼りない感じ）と土嚢を組み合わせず畦を作りました。土嚢袋にヘドロ土（掻出して山盛りにした）を移植ゴテで掬って入れて運びました。土嚢の口は縛らずハサミで切って、上にさらに土を盛って草も生える自然の土にならないかという作戦です。寒くなって土が凍ってしまい、作業はここで中断です。



この中間報告後、少しずつ畦を補強して、2月20日頃には、湧き水を入れます。

2月末にはカエルが来て産卵します。今年は何匹やってくるでしょうか。昨年トンボ池で見たヒキガエルは6匹。卵は5塊でした。卵塊も大半が消失し、残った卵からかえったオタマジャクシもいなくなりました。全滅と思います。

2005年の会報「みずみどり」には、「3月13日（日）、の梅まつりで赤塚トンボ池にカエルが集まっている、数えたら20匹いた、との情報があり、なるほどカエルが多かった。」とあります。この頃は、カエルがいなくなるなんて考えたこともありませんでした。ご近所の方も庭に出ると踏みつけそうになるくらいカエルがいた、と話されていました。当時、今より住宅が建て

込んでおらず、庭ももっと土が多かったのでしょうか。今やヒキガエル（アズマヒキガエル）は東京都区部では絶滅危惧種、緑地や水辺の減少によるとされています。



写真左は、2004年撮影。画面だけで6匹のカエルがいます。

トンボ池で卵やオタマジャクシがいなくなる理由のひとつは、捕って行く人がいることです。この場所の生き物として、そっとしておいてほしいです。小さなオタマジャクシの天敵は多い。カルガモはオタマジャクシを狙って頻りにやってきます。暖くなるとヘビ（ヒバカリ）やザリガニもオタマジャクシを食べ

ます。やむなく里親になって保護したり、コンテナで一部を隔離しますが、たくましさに欠けるように思います。

卵からオタマジャクシになるのは3月初め、オタマジャクシがカエルになるのは6月初め頃、2cmほどの小さな体で3カ月間、外敵いっぱいの世界で生き残った個体がやっと1cm程の子ガエルになります。カエルの紐状の卵は1500個とかそれ以上と言われていますが、私たちがよく見る大人のカエルになるのはわずか。オタマジャクシから大人のカエルになるまでの人生は過酷で切なくなります。

さて、夏になるとトンボが産卵し、水の中で卵やヤゴで冬を越します。毎年池を干してヘドロを掻き出す作業をしていますが、それは、この池に「トンボのヤゴはいない」という前提でした。今年は冬のかい掘りを止めたい。そしてザリガニを常時捕獲して、トンボの産卵前にヘドロを掻き出すなど考えていきます。来年は本当のトンボ池にしたいですね。

6月からアメリカザリガニの野外放出は法律で禁止

生態系に悪影響を及ぼす外来種のアメリカザリガニとアカミミガメ（ミドリガメ）が「条件付き特定外来生物」にようやく決まりました。アメリカザリガニは、水草を食べ、ヤゴなどを食べる食欲旺盛な生き物で、各地の自然の水辺やビオトープの小さな生き物に与える影響は大きく問題になっていました。子ども達のペットとして人気があり、有害外来生物の指定が遅れていました。6月からザリガニの販売や野外に放す行為は禁止されます（罰則もあります）。ペットとして飼うことは出来ますが、いやになったからといって野外に捨ててはいけないということです。ザリガニに限らず、生き物を飼うことは、死ぬまで面倒を見るということですよ。

活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田 090-1423-9894
坂本 090-4618-1295

1 赤塚城址ちょっと観察と手入れ（第2日曜日）（どなたでも参加できます）

赤塚城址周辺は自然が豊かなところです。生き物達の環境を守る活動を体験しませんか。草や土に触って自然を感じてね。生きものは観察したら元いたところに返します。ササ刈り等の作業もやります（カマは用意します）。

2月12日（日）10:00～11:30

3月12日（日）10:00～11:30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

参加費：無料（保険には加入していません）

もってくるもの：汚れてもよい靴と服装・手袋（軍手）、あれば図鑑、虫眼鏡など、

2 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ（第4土曜日）

2月25日（土）10:00～11:30

3月25日（土）10:00～11:30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

雨天の場合は中止（または翌日） 問い合わせは：事務局まで

汚れてもよい靴と服装で。作業手袋、

3 日暮台公園と樹林地の観察 日暮台公園前集合

3月5日（日）10:00～11:30

4月2日（日）10:00～11:30

4 環境なんでも見本市（エコポリスセンター主催）

2月1日（水）9時～3月1日（水）12時

いたばし水と緑の会も出展します。

●ビオトープボランティア大歓迎

いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があって楽しいですよ。ホームページ <http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）をお送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。

●身近な自然情報やご意見などをお寄せ下さい。